

# 並列多倍長陰的 Runge-Kutta 法を用いた 蔵本-Sivashinsky 方程式の高精度計算

静岡理科大学 幸谷智紀

HPCS2014 2014年1月7日(火) — 8日(水)

## 1 目的

複雑系常微分方程式 (ODE), 偏微分方程式 (PDE) の高精度な解を求めるためには高次の離散化を行い, 多倍長計算を併用する必要がある。我々は任意次数の Gauss 型陰的 Runge-Kutta (IRK) 法に基づく並列多倍長 ODE ソルバー BIRK (extended Bncpack for IRK methods) を実装した [2]。ここでは 1 次元蔵本-Sivashinsky (K-S) 方程式

$$\frac{\partial U}{\partial t} = -\frac{\partial^2 U}{\partial x^2} - \frac{\partial^4 U}{\partial x^4} - \frac{1}{2} \frac{\partial U^2}{\partial x}$$

境界条件:  $U(x+L, t) = U(x, t)$

初期条件:  $U(x, 0) = 16 \max(0, \min(x/L, 0.1 - x/L), 20(x/L - 0.2)(0.3 - x/L), \min(x/L - 0.6, 0.7 - x/L), \min(x/L - 0.9, 1 - x/L))$

パラメータ:  $L = 2\pi/q, q = 0.025$

を擬スペクトル法を用いて下記のように ODE 化したもの [1] を解いた結果を示す。

$$\frac{dy_j}{dt} = ((qj)^2 - (qj)^4)y_j - \frac{iqj}{2} \mathcal{F}_N(\mathcal{F}_N^{-1}\mathbf{y} \cdot \mathcal{F}_N^{-1}\mathbf{y}) \quad (j = 1, 2, \dots, N/2 - 1)$$

ここで  $\mathcal{F}_N, \mathcal{F}_N^{-1}$  は FFT および逆 FFT を表わす。今回は  $N = 1024$  として計算を行う。

## 2 陰的 Runge-Kutta 法のアルゴリズム

解くべき常微分方程式の初期値問題は下記の通り。

$$\begin{cases} \frac{d\mathbf{y}}{dt} = \mathbf{f}(t, \mathbf{y}) \in \mathbb{R}^n \\ \mathbf{y}(t_0) = \mathbf{y}_0 \\ \text{積分区間: } [t_0, \alpha] \end{cases} \quad (1)$$

積分区間を  $t_0, t_1 := t_0 + h_0, \dots, t_{k+1} := t_k + h_k, \dots$  と離散化し,  $t_k$  における近似解  $\mathbf{y}_k$  から次の  $t_{k+1}$  における近似解  $\mathbf{y}_{k+1}$  を求める  $m$  段 IRK 法のアルゴリズムは下記のようになる。

(A) 内部反復: 下記の非線型方程式を未知数  $\mathbf{Y} = [Y_1 \dots Y_m]^T \in \mathbb{R}^{mn}$  について解く。

$$\begin{cases} Y_1 = \mathbf{y}_k + h_k \sum_{j=1}^m a_{1j} \mathbf{f}(t_k + c_j h_k, Y_j) \\ \vdots \\ Y_m = \mathbf{y}_k + h_k \sum_{j=1}^m a_{mj} \mathbf{f}(t_k + c_j h_k, Y_j) \end{cases} \Leftrightarrow \mathbf{F}(\mathbf{Y}) = 0 \quad (2)$$

(B) 上記の  $\mathbf{Y}$  を用いて次の近似解  $\mathbf{y}_{k+1}$  を求める。

$$\mathbf{y}_{k+1} := \mathbf{y}_k + h_k \sum_{j=1}^m b_j \mathbf{f}(t_k + c_j h_k, Y_j)$$

これに対して, 非線型方程式を解く部分に簡易 Newton 法を用い, かつ, 連立一次方程式を解く部分に倍精度

(DP)-多倍長精度 (MP) 混合精度反復改良法を使用した結果, 1 ステップ進むアルゴリズムは下記のようになる。

初期値:  $\mathbf{Y}_{-1} \in \mathbb{R}^{mn}$   
For  $l = 0, 1, 2, \dots$  簡易 Newton 法

(1)  $\mathbf{Y}_l := [Y_1^{(l)} \ Y_2^{(l)} \ \dots \ Y_m^{(l)}]^T$   
(2)  $C := I_m \otimes I_n - h_k X \otimes J, \|C\|_F$  の計算  
(3)  $\mathbf{d} := (W^T B \otimes I_n)(-\mathbf{F}(\mathbf{Y}_l))$   
(4)  $C\mathbf{x}_0 = \mathbf{d}$  を  $\mathbf{x}_0$  について解く (DP)

For  $\nu = 0, 1, 2, \dots$  混合精度反復改良法

(5)  $\mathbf{r}_\nu := \mathbf{d} - C\mathbf{x}_\nu$   
(6-1)  $\mathbf{r}'_\nu := \mathbf{r}_\nu / \|\mathbf{r}_\nu\|$  (DP)  
(6-2)  $C\mathbf{z} = \mathbf{r}'_\nu$  を  $\mathbf{z}$  について解く (DP)  
(6-3)  $\mathbf{x}_{\nu+1} := \mathbf{x}_\nu + \|\mathbf{r}_\nu\| \mathbf{z}$   
(6-4) 収束判定  $\Rightarrow \mathbf{x}_{\nu_{stop}}$

(7)  $\mathbf{Y}_{l+1} := \mathbf{Y}_l + (W \otimes I_n)\mathbf{x}_{\nu_{stop}}$   
収束判定  $\Rightarrow \mathbf{Y}_{l_{stop}}$

$\mathbf{Y} := \mathbf{Y}_{l_{stop}} = [Y_1 \ Y_2 \ \dots \ Y_m]^T$   
 $\mathbf{y}_{k+1} := \mathbf{y}_k + h_k \sum_{j=1}^m b_j \mathbf{f}(t_k + c_j h_k, Y_j)$

## 3 数値実験

Intel Core i7 3820 (4 cores) 3.6GHz + 64GB RAM, Scientific Linux 6.3 x86\_64, Intel C++ 13.0.1, MPFR 3.1.1/GMP 5.1.1, BNCpack 0.8 の環境において, OpenMP による 4 スレッド並列化, 10 進約 80 桁計算を用いて  $t = 10$  における近似値を求めた結果を以下に示す。21~23 桁の桁落ちが生じていることが分かる。

80 桁計算 段数 ( $m$ )	$RTOL = ATOL = 10^{-60}$		
	20	30	40
80 計算時間 (s)	<u>130165.4</u>	160601.8	133541.0
ステップ数	6911	2667	1103
最大相対誤差	4.2E-38	2.7E-38	1.4E-38
最小相対誤差	1.1E-54	1.8E-50	1.7E-52
段数 ( $m$ )	$RTOL = ATOL = 10^{-70}$		
	20	30	40
計算時間 (s)	100695.2	<u>86331.4</u>	137232.9
ステップ数	6978	1738	1175
最大相対誤差	4.4E-48	1.9E-49	2.4E-47
最小相対誤差	2.7E-68	5.9E-68	1.3E-62

## 4 今後の課題

今回使用した K-S 方程式の離散化手法の場合, FFT, 逆 FFT を含む被積分関数  $\mathbf{f}(t, \mathbf{y})$  の計算で 8~9 割の計算時間を占めている。これを GPU もしくは Xeon Phi のようなメニーコア環境を用いてより高速に計算できるよう, ライブラリを整備してチャレンジしたい。

## 参考文献

- [1] E. ハイラー, G. ヴァンナー, 三井斌友・監訳. 常微分方程式の数値解法 II 応用編. シュプリンガー・ジャパン, 2008.
- [2] 幸谷智紀. 並列化した多倍長陰的 Runge-Kutta 法の性能分析. 情報処理学会研究報告 HPC, 2013.